

# 二重投稿、不正投稿防止の為の ガイドライン

米国外科学術誌編集者による最終案より

出 月 康 夫

現在、筆者は Annals of Surgery, American Journal of Surgery, World Journal of Surgery など幾つかの英文誌、日本臨床外科学会誌、日本内視鏡外科学会誌、日本医師会雑誌など幾つかの邦文誌の編集委員を引き受けているが、二重投稿、不正投稿の問題は編集者にとってたいへんに頭が痛い。最近では、二重投稿を防止するために、投稿の際に、二重投稿ではない旨の誓約書を著者に要求する雑誌が増え、また二重投稿や不正投稿が明らかになった場合には、著者に対して重い罰則を適用するところが増えているが、それでもなお二重投稿は後をたたない。

この問題はわが国に限ったことではなく、外国でも問題になっている。二年程前から、アメリカの外科学術誌の編集者達が集まって、この問題を考える会が発足し、二重投稿や不正投稿の防止のためのガイドラインをまとめようとしている。この会には、Am. J. Surg., Ann. Surg., Archives of Surgery, Surgery, Dis. Colon & Rectum., J. Pediatric Surg., J. Thoracic & Cardiovasc. Surg., World J. Surg., Endosc. Surg. など20誌以上の外科の主要な雑誌の編集者が集まり、まとめ役には、シカゴ大学の Gewertz 教授と UCLA の R. K. Thompkins 教授があたっている。すでに2年以上検討を続け、今年の10月にシカゴで開かれる米国外科学会の折に、最終的なガイドラインが作られることになっている。筆者もそのメンバーの一人になっているので、筆者の手許にも最近、その最終案のドラフトが送られてきた。この要点を記してご参考に供したい。

## (A) 二重投稿に関して：

(1)学会・研究会の抄録として出版された内容を改めて論文として発表することは二重投稿とは見なされない。ただし、抄録を参考文献として引用しておくこと。このことから逆に、抄録の発表だけではオリジナリティを主張するために十分ではないことになる。

(2)論文に使われているデータベースが、前に発表された論文のものより50%あるいはそれ以上増えているもの、または、同じデータを利用していても、前のものとは全く別の仮説を証明、あるいは否定するために、全く別の観点から分析した論文は二重投稿と見なさない。この場合には、同じデータベースを使用した前の論文を参考文献として引用しておくこと。

(3)英語以外の外国語で non-English Journal に発表された論文を英文に直して投稿することは二重投稿とは見なされない。non-English Journal にすでに発表したことを文中に明記し、この論文を参考文献として引用しておくことが必要。

(4)Proceedings または著書の chapter としてすでに発表されているデータについての論文は、二重投稿と見なされる。

(5)インターネット上ですでに発表されたデータを論文として投稿することは、二重投稿と見なされる。ただし、その論文の著作権をもつ出版社が論文を掲載した雑誌の刊行前にその論文をインターネット上に発表することがあるが、これは二重投稿とは見なされない。

(B) 不正な投稿に関して：

その例をあげると、

- (1)虚偽のデータであることを知りながら、意図的に投稿すること。
- (2)著者自身のものではないデータを投稿すること。
- (3)他誌に投稿したことを隠して投稿すること。
- (4)内容を知らない論文のスポンサーになったり、推薦すること。
- (5)研究に加わっていないのにも関わらず、名前を載せることを許可すること。
- (6)研究に参加しなかった者や、論文内容を承認していない者の名前を、共著者に加えること。
- (7)他の研究者がすでにオリジナリティを主張している論文を、故意に無視したり、参考文献から除くこと。
- (8)著作権について虚偽の申請をすること。

などが、ガイドラインの骨子となる予定である。このガイドラインが10月にまとめられて発表されると、それ以後は少なくとも編集者がこの会に加わってきた雑誌では、このガイドラインが使われることになる。

この中で、私達日本人として注目したいのは「non-English Journal」に発表された論文を英文に直して英文誌に投稿することは、その旨を

明記し、参考文献に引用しておけば、二重投稿とは見なされない」という項目である。最近、わが国では、自信をもってぜひ世に問いたい研究報告は英文で書いて英文誌に投稿しようという傾向が強まり、その結果、学会の邦文誌による論文が集まらず、邦文誌が空洞化する現象が見られる。学会の中には、邦文誌をやめて英文誌に変えようという動きもみられる。これも悪いことではないが、わが国の学会が外国の出版社に依頼して、英文誌を出しても citation index や impact factor が極めて低く、なかなかよい論文が集まりにくいというのが実情であろう。結局、よい論文は外国の英文誌へという傾向はなくなる。

邦文誌に発表したものを英文に直して外国の一流誌に投稿してよいということになれば、学会も無理をして英文誌を出すこともないし、邦文誌の空洞化現象は解消し、われわれもよい論文を日本語で読むことができる。限りある資源の無駄も避けられる。

インターネット時代を迎えて、印刷された学術誌が果たす役割も次第に変わってこようが、そのときには、また新しいルールが必要となるかもしれない。

(埼玉医科大学総合医療センター副所長)  
東京大学名誉教授)